◇常夏の「タイ」に行ってきました　　大槻伸次

はじめに

今秋、H 社の「タイランド 4 日間」という、タイの首都バンコクとその郊外を巡るコンパクトな旅に行ってきました。4 日間と云っても、前後 2 日間はまるまる移動日だったので、観光はほんの 2 日間だけでした。

タイと云えば東南アジアに位置する立憲君主制国家で、東南アジア諸国連合（ASEAN）の加盟国。通貨はバーツ（1 バーツは 3.5 円）、人口は 6,718 万人、首都はバンコクです。国土は、インドシナ半島中央部とマレー半島北部を占める。南はマレーシア、東はカンボジア、北はラオス、西はミャンマーと国境を接する。マレー半島北部の西はアンダマン海、東はタイランド湾に面している。

タイと日本との関係は、14 世紀頃から 18 世紀ころまでアユタヤに日本人町がつくられ 15 世紀から 16 世紀初頭までアユタヤ王朝下、軍事力と貿易による利潤を背景に政治的に力を持つようになったとも言われている。この時代活躍した日本人と云えば「山田長政」がいる。彼は、天正 18 年（1590 年）頃から寛永 7 年（1630 年）の江戸時代前期、シャム（現在のタイ）の日本人町を中心に東南アジアで活躍した人物である。現在は、進出する日本企業が多く、タイにとって日本は重要な貿易相手国となっている。

そこで、昔から日本との関係の深い常夏のタイランドを一度は訪れてみたいと思っていたところ、タイミングよく今回のツアー（添乗員は同行しない）が発売されたので行ってみることにした。

＜1 日目＞2018(H30)年 11 月 26 日（月曜日）

BS 太田から成田空港行きの高速バスに乗車。成田空港第 1 ターミナル 4 階南ウイング到着後、H 社のツアー受付デスクに出向き諸手続きを済ませる。その後、書類をもってタイ国際航空デスクに出向き各自、発券機を操作して航空券（BOARDING PASS）と預け入れ荷物のタグの発券を行う。更に、タイ航空の受付カウンターでパスポート等の確認を受けて荷物の預け入れを行い一連の手続きは終わる。

航空券の発券と荷物の預け入れが終わったので出国審査を受けるため同じフロアーの出国ゲートに向かい携帯する荷物と身体検査を受ける。特に問題になるようなこともなく出国検査場へ向かう。

従来の出国検査はパスポートを検査官に提出し審査を受けスタンプを押してもらうという手順だったが、自動化されたため自動化ゲートの専用レーンに進みディスプレーの案内に従って装置の前に立ちパスポートを読み取り台かざし、顔を全面のディスプレーに向けると顔情報が読み取られ出国 OK のドビラが開いて一連の出国検査が終了する。（パスポートにスタンプが欲しい人は出た所で押してくれる）

そこから最も遠いタイ国際航空の出国ゲートに向う。暫らくして搭乗が開始され、

我々2人のシートは62Jと62K（窓際）は、主翼の真上だった。17時30分、タイ国際航空機はバンコク国際空港に向けて予定通り離陸する。成田を離陸した航空機は太平洋上に出て、八丈島沖から日本列島沖を沿うように南下、沖縄沖、台湾沖、中国海南島沖を南下しベトナムの中部を縦断しタイのバンコク国際空港（スワンナプーム空港）に向かった。

離陸から1時間程度で、つまみと飲み物が出て、機内食が配られた。

食事後は、タイ国の入国カードが配られたので事前にネットで調べてきたとおりに記入した。機外は真っ暗となり何も見えずじまいだったが、台湾沖を通過したとき、台湾高雄市の街の明かりなのだろうか雲に反射して明るく見えた。

深夜タイ国際空港に到着に無事到着（現地時間24:30・時差マイナス2時間）。航空機を降りてからタイの入国審査ゲートに進まなければならないが、旅行社で配布されたパンフレットでは何のことやらわからないので仲間の行き先から目を離さずついて行った。一緒の仲間が居なかったらスムースに到達できたかわからないほど歩いた。

無事荷物を受け取り（受け取り場所は大きなディスプレイに到着機はどのレーンと表示される）指定されたゲートを出ると指定された場所に現地ガイドさんが、待っていて妻とチェックを受ける。全員の確認が終わると待機していたバスに乗り込みホテルに向かった。

ホテルまで45分程度かかると告げられ、現地添乗員さんの自己紹介とホテルの案内や旅行中の注意事項など受ける。中でも、ホテルでの枕銭は1人20バーツは必ず置いてくださいと云われた（そこで、ホテル到着までに円をバーツに両替をしてもらった）。そして煙草等ごみのポイ捨ては厳しい罰が有るから注意してくださいとの言葉に力が入っていた。

＜2日目＞2018(H30)年11月27日（火曜日）

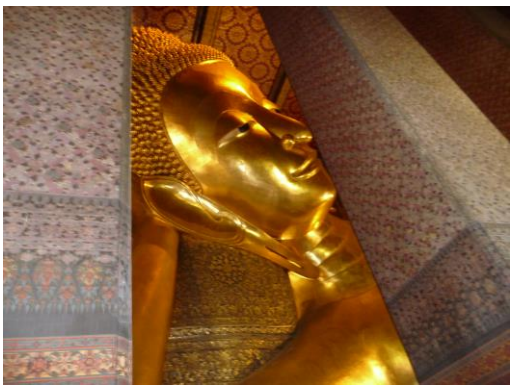
2日目行程　ホテル8時発→【涅槃仏寺】観光→【暁の寺】観光→【カオサン通り散策】→【昼食は飲茶】→【大理石寺院】観光→【お買い物3店】→【タイ古式舞踊鑑賞と食事】→【ニューハーフショー】約1時間→ホテル帰着21時30分

4時半にセットしておいた目覚まし時計に起こされる。天気は晴で、心配していた暑さもないようで半袖で快適に過ごせるようだ。6時よりホテル1階にあるレストランが開くので早めにレストランで食事を済ませる。

8時00分、現地ガイドさんが全員の人数を確認しバンコク市内観光のスタートです。バスがホテルを出て最初に目にした光景は、早朝から道路の脇に食べ物屋の屋台がびっしり並び、多くの客が朝食をとっていた。タイでは家庭で自炊するよりも外食が常識だそうで、だいいち1万バーツ（3～4万円）以下のアパートには台所が備わっていないというから外食はあたりまえなのである。所得平均が3万バーツ（9

～10 万円）に満たないタイでは、台所付きの住まいは高級なんだそうです。
　また、車窓から市中を眺めていると日本車の多さにビックリ仰天。添乗員さんの説明によるとトヨタ車が圧倒的（日本車以外見られない）で、次いで本田、日産、マツダ、三菱、スバルなど日本ブランドの車は全て見られる。他にバイクの多さにビックリ、交差点の前列はバイクが勢揃いし信号が変わると一斉に走り出す姿はすごい迫力である。また、タイ独特の 3 輪タクシー（トゥク　トゥク・tuk tuk）が走っているのが多くみられたが、添乗員さんによると源は日本のダイハツが製造していた「ミゼット」という 3 輪トラックが原形とか言っていた。また、タイで唯一つの純国産車とか。以前ニュース等でタイの交通渋滞について深刻に語られていたが、一度信号待ちで止まってしまうとしばらくは動き出さないことがあった。昔、後発国では街中に溢れかえるほどの自転車の列が見られたが、現在のタイではどこに行っても自転車の姿はほとんど見られない。バンコクの街並みの珍しい風景をぼーっと（チコちゃんに叱られるが）眺めていると、あれがタイの最高学府であるチュラロンコン大学と案内があった。やがて最初の観光先の「涅槃仏寺」に到着する。ゲートをくぐり寺の境内に入ると、あのタイ独特な寺の姿に、あーあタイに来たんだなと改めて実感することになった。

▼<u>涅槃仏寺（Wat Pho ）</u>



　王宮の南にある涅槃仏寺（Wat Pho）はバンコクで一番古く、タイで最大の寺院だそうです。本尊の涅槃仏は全長 46m、高さは 15m。
　ほんとにゆったりとし（ぴかぴかの金色に輝くお釈迦様が、右手で頬杖ついて横たわっている）、リラックスした姿で横たえているよう.に見えるが、死に瀕して涅槃に至り、悟りの域に達したことを表すそうです。
　足の裏には、見事な細工がしてあって、足の指に指紋が描いてあった。建物の入口を入ると涅槃仏の頭部、回廊を進むと胴体部、そして足でさらに進むと左に 90 度折れると足の裏面、更に左に 90 度折れると右側の壁に沿って黒い鉄の鉢が長い廊下の壁にずらりと置かれている。
　この鉢に入れるのはお金ではなく、係の人から鉄のチップの入ったお椀を貰って、（我々の観光にはサービスがなかった）それをパラパラと入れながら歩くそうです。
　涅槃仏寺の観光が終わって、次の観光先は「暁の寺（Wat Arun）」の予定であるが、暁の寺は「チォオプラヤー川」の対岸に在るため、渡し船（両寺は対岸にあり、渡し船で 5 分程度で行けるが、茶色に濁った大河である）で行くことになる。
　涅槃仏寺の境内からと思われる船着き場の木戸（乗船券は添乗員さんが纏めて購入）を入ると桟橋があり乗船する。対岸には「暁の寺」の雄姿が手に取るように聳えている。※涅槃仏とは釈迦が入滅する様子を仏像として表したもの。

▼<u>暁の寺（Wat Arun）</u>

ワットポー、エメラルド寺院に並ぶ3大寺院の一つ、ワットアルン（暁の寺）。三島由紀夫の小説『暁の寺』の舞台にもなったことで知られているらしいが、私自身は初めて知った。チャオプラヤー川沿いに聳え立つ寺院はバンコクを象徴する風景という。

仏塔創建についての記録は定かでないようだが、アユタヤ王朝時代にはすでにあったという。その後、現王朝の前のトンブリー王朝時代は、ここが王朝寺院とされていた。その後バンコク王朝となり王室寺院ではなくなったが、ラーマ2世からは特別な保護を受け増築され今の姿になったと云われている。

敷地内には5基の仏塔があり、一番大きな仏塔（大仏塔）の高さは75mもある。台座の周りは234mある。また、ヒンズー教の影響を受けて建てられているため、上部にはヒンズー教のエラワンという像が、その上には座っているインドラという神様の像が鎮座している。他の4つの仏塔はこの大きな仏塔の周囲を囲むようにたてられている。本堂はラーマ2世の頃に建てられたもの。回廊に並ぶ仏像は120体もあり、その前には中国の影響を受けた石像は144体も並んでいる。本尊の台座の下にはラーマ2世の遺骨が納められています。暁の寺は過去には、手摺のあるかなりの高いところまで階段で登って行けたそうであるが、急な階段であるため現在は禁止されているので残念ながら上に行けなかった。「暁の寺」観光後、チャオプラヤー川を再度渡し船で涅槃仏寺側に戻り、カオサン通り散策へ向かう。

▼<u>カオサン通り散策</u>

外国人バックパッカーの溜まり場だという。「カオサン」とはタイ語で「白米」の意味で、元々はこの周辺に米問屋が多かったことに由来する。300mほどの通りにはバックパッカー向けのホテルやゲストハウスが軒を連ね、レストラン、インターネットカフェ、旅行代理店、古本屋、ランドリー、衣料品店、土産物店等、旅行者に必要な店がずらりと並んでいる。

生絞りのオレンジやタイ風ミルクティーなどの飲み物や果物、パッタイ、ガイヤーン、ロティ、ケバブ、食用の虫など売る屋台が多いという。中には海賊版のCDやDVDを売る店や国際免許証や国際学生証など身分証類書の偽造を引き受ける怪しげな店やタトゥーやパーマ、タイ式マッサージをする店なども存在、混沌とした情景を醸し出している。

セブンイレブンやファミリーマートなどのコンビニやマクドナルドやバーガーキング、サブウェイなどのファーストフード店、スターバックスなどの喫茶店なども

通り沿いやその周辺に存在する。またこのようなバックパッカー向けの施設が多い地区は、並走するラムブトリ通り、T 字路を形成するチャクラポーン通りなどへ拡大傾向にあるという。

妻やその仲間たちは衣料品屋前で足が止まり、寝間着にしてもいいとタイ風の柄パンツ（薄手なのでパジャマに良いとか云って買っていた）を買っていたが、女性たちはこういうものを見つけるとなかなか動きださない。…カオサン通りをしばし（約 45 分）の散策後、昼食会場へ向かう。

▼Lunch

タイはシンガポールやマレーシアほどではないが中華系が多い国だそうで、人口の 10%が中華系で占められているという。バスで街を移動していると、タイ語の看板を見ても何が書かれているのかさっぱりわからないが、漢字が併記されていれば何の店かの見当はつく。食の世界でも中華の影響は濃厚で、街のあちこちに中華料理店がたくあるそうだ。また、飲茶の店も多くタイ人にとって飲茶は身近なものになっているという。昼食で、テーブルを同じくした人達と打ち解けあい和気あいあいの内に約 1 時間程度昼食時間も終わる。昼食後の観光予定は、大理石寺院の観光とお買い物 3 店（ジュエリー、寝具、雑貨の店）の立ち寄りが予定されている。

▼大理石寺院

…ドウシット地区の観光名所　ラーマ V 世により屋根瓦以外はすべて大理石で建造された純白の寺院。境内には緑豊かな庭がある…

大理石寺院は現在の国王が住いになるチットラダー宮殿の西側のドウシットエリア北側にある。正式名称はワット・ベンチャマポーピット（第 5 番目の国王が建造した寺という意味だそうです）は屋根瓦を除くすべての建材に大理石（大理石はイタリアのトスカーナ産とか）を利用しているところから英語では Marble Temples 呼ばれているそうです。

到着後、寺院の本堂（靴を脱いで）に上がって本尊の前で座して、添乗員さんの説明に聞き入った。1899 年、当時の王様であるラマ V 世により建設が開始された。特徴として本堂は上から見ると左右対称の十字型（四方に破風がある）をして、イタリア人設計技師による西洋技術が幅広く取り入られている点で、屋根には色鮮やかなオレンジ色の瓦が使用され、窓にはステンドグラスがはめ込まれているから東洋と西洋の折衷である。本堂の後ろには豪華な回廊がある。また、回廊に囲まれた広場の床も大理石でできているというから驚きである。観光の途中から空模様が悪くなってぽつりぽつりと雨がぱらついたが、大事に至らず観光を終えることができた。

▼宝石店、寝具店、雑貨店お買い物タイム

大理石寺院の観光を終えた後は、宝石店（30 分）、寝具店（45 分）、民芸店（30 分）に立ち寄った。寝具店はシンガポールに行った時と同系列の店で、扱っている寝具（スポンジ製の枕が主）と説明は全く同じだった。同行の仲間が云うには以前、枕を買ったが、スポンジの匂いがきつくて捨ててしまったとか言っていた。

お買い物タイムも大方の人はじっと我慢でやり過ごす。お買い物タイムの終了で夕食会場へ向かう。

▼Dinner

夕食はタイ料理を戴きながら、タイ古典舞踊ショーを鑑賞する。我々団体客は長テーブルと長い椅子で、舞台は右方向に見る感じで座ったので、首を右に振らないと見えないので、上席でなかった。噂によるとダンサーはほとんどがアルバイトとか言っていた。夕食後、ニューハーフショーに参加しない人達はホテルへ直行。

参加者は、我々を含め 14 名だった。（34 名中）

▼ニューハーフショー（オプション参加）

ニューハーフの美人コンテストで世界一が続々生まれるタイでは、もと男性とは思えない美人ぞろいで、日本の「はるな愛」も目じゃない。

我々の行った会場は老舗のニューハーフショー会場だそうで、広々としてゴージャスなシアターが特徴とかいっていた。

テーブルが付いた前 8 席が VIP 席だそうで、入場時にコーラを戴き、一番前のテーブル付き指定席に陣取った。そこで、一番前の席ということは超 VIP 席だったいうことになる（添乗員さんの配慮で、前席を取ってくれたとか聞いた）。添乗員さん曰く、ニューハーフショーはタイランドの宝塚とか（ちょっとオーバーだけれど）。

容姿良しで、ダンスもトップレベルの女性より美しいレディボーイによる華やかなショーは、一流のエンターテイメントである。また、ショーの中で日本人の入場を意識してか、日本の富士山と鳥居や社が描かれた舞台装置がセットされ、日本の女性歌手のヒット曲をそっくりに歌っていたからどうも変だなと思ったらロパクだった。こういう華やかなショー自体初めての経験なので、なんとコメントしてよいか分からないが、タイの夜の思い出として参加してよかったなと思っている。

ショーの最後に踊り子たちが舞台から降り、VIP 席のお客さん達の額にまっかなキスマークをつけてくれるサービスがあった（私自身は遠慮した？）。

＜3 日目＞2018(H30)年 11 月 28 日（水曜日）

3 日目行程　ホテル 7 時発→バンコク郊外の【メークロン市場】観光→【ココナッツファーム】散策→【ダムヌンサドゥアック水上マーケット】観光→【昼食・ホテル】→【免税品店】→オプションの夕食付【ディナークルーズ】参加なし→ホテル帰着 16 時

ホテルの出発が am7 時と告げられる。なんでそんなに早く出発しなければならないのかと思ったら、メークロン市場を走る列車の通過時間に居合わせないと市場を閉じたり開いたりする現場を見ることができないからである（観光の最大の目的）。そこで、メークロン市場を列車が通過する時間が am8 時 30 分だから逆算してその時間に間に合わせるためなのである。ホテルを出発し、バンコクの郊外に出て平野を走り続ける（高速道並みの立派な国道）と水を張った水田と思われるのが見えてきた。ところが水田と思われる田んぼは緑がなくて、なんだろうなと思っていたところ、添乗員さんから塩田だと云われ納得した。そこでここは海が近いと思ってあっちこっち見渡したが、海を見ることは出来なかったから海水を長い距離引いているのだろう。ホテルを出て約 1 時間 30 分程度でメークロン市場に到着する。

▼<u>メークロン市場</u>（約 1 時間 30 分滞在）

メークロン市場（Maeklong Market）とは、バンコクから南西に 70km.離れたサムットソンクラーム県にあり片道 1 時間 30 分程度でアクセスできるところにある地元民向けの市場です。同県で生産された魚介類や果物などが都市圏よりも比較的安価で売られていることから、地元住民が足繁く通うマーケットとか。市場には特にお土産になるような衣類や雑貨類は並んでないが、メークロン市場は有名な観光地として知られている。その理由は「現役で使用されている鉄道の両脇」という日本では考えられず奇妙としか言いようのない場所で市場が開かれているからである。そこで列車の通過時間以外は閑散としているという。

ところが、1 日 7 回訪れる列車の通過を知らせるアナウンスが流れると、市場の商人たちは一斉に日除けテントを畳み、線路にはみ出た棚を必要最低限だけ両脇に引っ込めて列車の通過をやり過ごす。

そして列車が通過し終わると、商人たちは何事もなかったように日除けテントと棚を定位置に戻し、再び何事もなかったように商売を始める。この一連の動作は 10 分程度で終わるようだが、摩訶不思議としか言いようのない様子が非常に面白いため、列車の通過時間が近づくと、市場は観光客で溢れかえり大混雑が起きるのであ

る。要は、連日多くの観光客が訪れるのは、列車の通過の瞬間を見に市場を訪れているのであるが、市場関係者は観光客を迷惑がったりはしないという。

メークロン市場（正式な名前は存在しないそうです）という名前は、市場が開かれている場所が、タイ国鉄のメークロン駅（Maekiong railway station）の目の前であることに由来しているという。市場の全長は 180m 程度だそうです。

我々は午前 8 時 30 分の列車を待ったが、あまりの混雑に身動きが取れないほどで、市場内にいること自体が大変なほどの混雑ぶりである。

列車が市場に近づいてくると、近くのメークロン駅の駅員か列車の車掌と思われる人が踏切に立って列車に対峙し、安全確認ができたとき緑の旗を高く掲げ列車の前進を促していた。自身はあまりの混雑に写真に撮りたいベストポジションの確保は出来なかったが、列車が通過する様子をすれすれのところで見ることができた。

約 45 分程度の観光後、ダムヌンサドゥアック水上マーケット観光へ向かうが途中、ココナッツファームに立ち寄る（メークロンから約 10 分程度）。

▼<u>ココナッツファーム見学</u>（約 20 分滞在）

ココナッツの木がたくさん見えてきたところが、ココナッツファーム到着です。

到着後、ココナッツの実から砂糖やジュースを作っている話をほんの一寸聞いて、後はトイレとお土産のお買い物へまっしぐら。

ココナッツファームの大きなお土産館に入ると、いろいろなお土産が置いてある。カラフルなタペストリーやバッグ、ココナッツの実の器、木彫りの象、水上マーケットの物売りを模したボートの置物などなど所せましと並べられている。また、リラックスアイテムのお香やアロマキャンドルなどあった。

ところが、どれも値札が付いていないので、本当のところはいくらなのかわからない。添乗員さんの話によると交渉して値切って買うのがコツといわれていたが、日本人には馴染みがないので戸惑ってしまう。

我々はタイに来た記念として水上マーケットで見かけた「物売りのボート」の置物を求めてお土産館を出た。バスの出発までの間、広場にある売店を覗いていたらココナッツシュガーの味見が置いてあったので一つ二つと摘まんで舐めてみたが、サトウキビから作った黒砂糖よりさっぱりしていて雑味が少なく美味しく感じたので興味がわいた。

そこで、妻とココナッツシュガーの袋詰めをみていたら店員さんが 1 袋 60 バーツと云われたが、2 個買うから 100 バーツにしてと妻が身振り手振りで値切ったら了解され、2 袋買うことにしたら一緒に見ていた仲間も同じ条件で買ったようだ。尚、売店の奥でココナッツの樹液を煮詰めてココナッツシュガーを作っていた。

樹液を煮詰める燃料はココナッツヤシの実の乾燥したものを燃やし有効活用していた。ココナッツファーム見学と云っても、ココナッツ農場を見学したわけでもなく単なるトイレタイムを兼ねた雑貨のお買い物タイムで、次の観光先であるダムヌンサドゥアック水上マーケットに向かうための小休止でもあったのである。

▼<u>ダムヌンサドゥアック水上マーケット観光</u>（約 1 時間滞在）

バンコクから南西 80km.の所に位置する文化保存と観光用に開発された水上マーケットのこと。この運河は 150 年ほど前、ラーマ 4 世の時代に作られたという。ここでの売り買いは小舟に乗ったままで行われる珍しいもので、新鮮なフルーツや野菜、肉、魚貝類などを山積にした小舟（手漕ぎボートが主流だが自動車エンジンを再利用したボートも走っていた）が、運河を所せましと行き交い、景気のいい売り声が飛び交っていた。また、水路の両端にはお店がびっしり並び、小舟に乗ったまま買い物ができる。我々が乗ったボートは年配のおばちゃんが船頭で、店頭の品物に興味を示すとオールを休め、買い物をする時間をとってくれる。

尚、水路は縦横に走っていて交差点もあって何通りかの水路があるようで道路と同じように利用されている。観光後、バンコク市内に戻りランチタイム会場へ。

▼<u>Lunch</u>（約 1 時間）

昼食は市内ホテルにてビュッフェ形式の昼食でした。昼食後、バンコク市内唯一つの免税品店であるというキングパワー・コンプレックスへ。

▼<u>免税品店にてお買い物タイム</u>

バンコク市内で唯一とされる「キングパワーランナム免税品店」へ案内される。免税品店に入ると、各自にパスポート番号などが記載されたお買い物カードが渡される（事前に個人情報が店に伝えられている）。免税品店は関税や消費税、酒税たばこ税がかからず、バンコク市内のデパートやショッピングモールで買うよりも 10～15%安いという。

我々は、お土産を添乗員さんに注文していたので各フロワーをふらふらして何も買わずに遣り過ごした。集合時間が近づいたので一階のフロアーの集合場所に行くと皆さんも手持無沙汰な様子だった。

この後の予定は、オプションのディナークルーズ（Grand Peari Dinner Cruise 2,200 baht）が用意されていたが、明日の出発が超早いので参加を諦めた。
オプションに参加しない人（大部分の人達）はホテルに直行だったが、夕食がないので各自調達するか、ホテル近くのレストランを探さなければならなかった。

我々は疲れていたので、ホテル近くに「セブンイレブン」があったので簡単に食べられそうな食料を調達し、ホテルの 23 階（最上階）からバンコクの街並みを堪能しながら食事を楽しんだ。

＜４日目＞帰国日

最終日は観光なしで am4 時にホテルロビーに集合し、4 時半ホテル出発である。我々は午前 2 時半目覚し時計に起こされ荷物をまとめ身支度を済ませた。そして早めにロビーに降りたつもりだったが、既に先口がいた。ロビーでは添乗員さんから BOX 弁当を戴いてバスに乗り込み、バンコク国際空港に向かった。

帰国便は、定刻の 8 時 00 分タイ国際空港（スワンナプーム空港）を離陸。離陸から 1 時間後飲み物と食事が出される。成田空港着 15 時 50 分でした。

最後に

東南アジア方面は、台湾、マレーシア・シンガポールに次いで 3 度目だったが、今回の「タイランド 4 日間」は値段がリーズナブルであったが、観光もホテルも食事もほぼ満足だった。難点は、毎日が超強行軍だったのでホテルに帰着してからのシャワーを浴びる時間さえ惜しいほどだった。

また、快適な気候（タイの 11 月は乾期で気温は日中 32 度程度、朝晩は 27 度前後で蒸し暑くない）で、寒い日本に帰るのが億劫になった。

タイは人口の 10%が中国系だそうで、漢字の看板が多く見られた。そこで中華料理（飲茶）も存在し本場タイ料理と合わせ、我々日本人にも馴染みがありメニューも豊富で食べやすく美味しかった。

現在、タイは東南アジア随一の経済発展を遂げた国で道路は比較的よく整備されているが、地下鉄や路面電車などの社会インフラが足りていないようで、通勤は自家用車やバイクが主流のため道路が常に超混雑上状態であるようだ。

そこで、メークロン市場に行く日も道路の状態で指定時間に辿り着けないことを考慮して早めにホテルを出発するのだと聞いた。

旅の途中、タイ人は挨拶として必ず合掌をしてくれるが、その時どう対応しようかと戸惑うことがあった。日本では神社やお寺に参拝したときや食事前に合掌をすることはあるが、日常はないだろう。

観光先として三大寺院（涅槃仏寺・暁の寺・大理石寺院）巡りとメークロン市場やダムヌンサドアック水上マーケットを巡ったが、何処も優劣つけがたかった。また、エンターテイメントの「ニューハーフショー」などタイならではの文化の一端にも触れることができたのは幸いだった。

また観光の途中、何の変哲もない橋の下の小川を漠然と覗いていたら、何と大きなトカゲ（胴の直径が 15 センチ位で長さが 60～70cm 位あろうか）が、陸に上がろうとしているところを発見し皆で大騒ぎした。他にも小さいのが、のそのそ這っていて、さすが熱帯の国なんだなと思うことしきりだった。

ということで「タイランド 4 日間」はあっという間に終わってしまいましたが、国内旅行とはまた違った、旅の面白さや楽しさ、そして緊張感がありました。